

学位論文審査結果の要旨

学位申請者 氏 名	畑 晴陵
審査委員	主査 鹿児島大学 教授 本 村 浩 之
	副査 鹿児島大学 教授 寺 田 竜 太
	副査 琉球大学 教授 立 田 晴 記
	副査 鹿児島大学 准教授 坂 巻 祥 孝
	副査 鹿児島大学 准教授 久 米 元
審査協力者	印
題 目	Taxonomic review of the anchovy subfamily Engraulinae (Teleostei: Engraulidae) (カタクチイワシ亜科魚類の分類学的研究)
<p>インド・太平洋産カタクチイワシ亜科魚類3属（タイワンアイノコイワシ属 <i>Encrasicholina</i> Fowler 1938、カタクチイワシ属 <i>Engraulis</i> Cuvier, 1816、インドアイノコイワシ属 <i>Stolephorus</i> Lacepède, 1803）の分類学的研究をおこなった。骨学的形態の観察を通じ、3属の新たな標徴形質が確認され、これらの単系統性が支持される結果となった。</p> <p>さらに、各属の種階級の分類学的研究をおこない、学名を整理するとともに、各種の標徴と分布域を明らかにした。タイワンアイノコイワシ属では、従来シロガネアイノコイワシ（本研究における <i>E. heteroloba</i>）にあてられてきた <i>E. devisi</i> は <i>E. heteroloba</i> の新参異名であることが明らかとなった。また、従来 <i>E. heteroloba</i> があてられてきたミズスルルに適用すべき学名は、従来 <i>E. heteroloba</i> の新参異名とされてきた <i>E. pseudoheteroloba</i> であることが明らかとなった。さらに、これまでほとんど記録のなかった <i>E. oligobranchus</i> と <i>E. macrocephala</i> の新たな分布域を確認し、再記載を行った。すべての名義種の分類学的位置づけを検討するとともに、3新種の記載を行った。</p>	

インドアイノコイワシ属に関しては、すべての名義種の分類学的位置づけを明確なものとした。これまで*S. waitei*とされてきた種を検討したところ、*S. bataviensis*、*S. baweanensis*、および*S. waitei*の3種が含まれることが明らかとなった。また、*S. bataviensis*と*S. baweanensis*は*S. insularis*の亜種として、*S. oceanicus*とともに記載されたが、*S. insularis*と*S. oceanicus*はそれぞれ*S. tri*の新参異名と有効種であることが明らかとなった。さらに、従来*S. insularis*とされてきた種には、これまで*S. baganensis*の新参異名とされてきた*S. bengalensis*を適用すべきであることが明らかとなった。*Stolephorus baganensis*は亜種である*S. b. megalops*とともに記載されたが、本研究により*S. baganensis*の有効性が確認され、*S. b. megalops*は*S. tri*の新参異名であることが確認された。さらに、従来*S. indicus*と同定されてきた種は、*S. baliensis*、*S. commersonnii*、*S. indicus*、および*S. insularum*の4種が含まれることが明らかとなった。これまで*S. commersonnii*を適用されてきたヤエヤマアイノコイワシには、*S. rex*を適用すべきであることが明らかとなり、また、本研究においてアフリカ東岸とマダガスカルに分布するものを、新亜種*S. r. zephyrus*として記載した。また、その他の種に関しても再記載を行い、それぞれの有効性を確認したほか、2新種の記載を行った。

これらの結果として、タイワンアイノコイワシ属とインドアイノコイワシ属にそれぞれ9と27有効種を確認した。これらの結果に基づき、インド・太平洋のカタクチイワシ亜科魚類の形態獲得の過程を推定したところ、派生的な種ほど、上顎が短くなり、体腹縁の稜鱗数が減少する傾向にあり、これらは内湾や河口の柔泥底質域から外洋の表中層域へ生息域の環境への適応の結果と考えられた。

以上のように、本研究では水産上重要なカタクチイワシ亜科魚類を分布域広域から得られた膨大な一般標本とタイプ標本に基づき、多くの学名変更を伴う分類学的検討を実施した。この結果、本亜科魚類は外部形態による正しい種同定が可能となり、この研究成果は魚類学のみならず、海洋生物学の基礎的知見として多大な貢献をすることが期待される。よって本論文は、学位論文として十分な価値があるものと判定した。